

声の仏念

編集・発行：浄土真宗本願寺派岐阜教区基幹運動推進委員会広報部

〒500-8882 岐阜市西野町3丁目1 電話(058)262-0231 FAX(058)263-7353

1999(平成11)年11月1日発行 vol.208

報恩講 おとぎ

如燈風中

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(農民芸術概論綱要)

今年の六月、関東から東北そして新潟へのご旧跡参拝の途中、私は岩手県花巻市(宮沢賢治の故郷)を訪れる縁に恵られました。冒頭の言葉は、その宮沢賢治によるものです。彼は、詩人であり、童話作家であり、科学者であり、教育者であり、農夫であり、そして粉れも無くひとりの宗教者でした。

浄土真宗の篤信の家に生まれ育った賢治は、後年『法華経』を奉ずる求道の人となりました。先の言葉は、大乘の菩薩たちが誓われた願いそのものであり、賢治自身の宗教的境涯からの生きる姿勢、信仰の有り様が表明されたものであると味わえます。

私たちは現在、宗門の基幹運動をおとして、「信心の社会性」とは何かを学びの課題としています。それは、ひとりの念仏者として社会とどう関わるのか、念仏者としての社会的責務と何か、信心がこの私をしてどのように社会にはたらくのかということを問うているのです。私なりの理解で分かりやすく表現すれば、生かされて生きるという(いのちの尊さ)に気づかさせていただいた私が、その喜びを私だけの喜びとせず、他の人々と共に喜び合えるような生き方をしたいということです。

私は思うのです。抑圧され、差別され、虐げられて苦悩するのちに共感する感性、これこそまっとうな宗教性であるのではないかと。凡夫であるこの私をして、すべてのいのちと生き生きと繋がろうとするはたらきは、まさしく信心のはたらきであり、念仏によって私のものとなるのです。

合掌

岐阜教区基幹運動推進委員会副会長
西濃南組 縁覚寺 楠 眞

誇れる伝統、報恩講

浄土真宗には報恩講という他に類を見ない誇るべき伝統がある。浄土真宗が蓮如上人によって急拡大してからあまり変わらないうえに、長く伝承されてきたこと、そして、寺々で勤め、本山で勤められるというのも特異なら、テレビや新聞で取り上げないが、これほど多くの日本人が参加する伝統行事はないだろう。秋も終る頃、家々のお取り越し、寺のお取り越し、本山のご正忌へ参ること、様々な形で報恩講が人々の話題になる。お寺での報恩講は近隣の寺がお互いに参って、普段あまり読まない十二礼文や礼讃などあげたり、お供えや飾り（莊厳）も賑やかである。基本は本山の報恩講がお手本になっているので寺ごとに大差なく勤められている。報恩講の時期は収穫

の時期でもある。収穫の喜びの民俗行事と結び付くと、その土地特有のことが報恩講の行事の中に入ってくる。この部分には様々な行事やしきたりとなって受け継がれているのである。収穫の秋は一年中で一番豊かな時である。この収穫の喜びが「おとき」に反映している。本山でも「おとき」がありそれに倣ったともいえるが、「おとき」はそれぞれの地で様々な食文化となっている。米を作る農民でもめったに白米のご飯が食べられない時代、「おとき」は白いご飯が食べられる数少ない機会であった。山村では稗など雑穀が主であるからおさらである。米も野菜も収穫のとき、それを持ち寄って大ご馳走を食べる。報恩講はそんな機会だったのである。

ダム建設で村がなくなった徳山村ではオベットウ箱（お講箱—お椀が入っている）を持って

寺（道場）へ参り、持ち寄った大根を唐辛子をいれた辛い味噌汁にし白いご飯の「おとき」を食べた。

大根の一番おいしいとき、少し寒さの頃、大根の味噌汁の匂いはたまらない。

大根汁をいただくにたくさんの方が集まる有名な京都の千本釈迦堂や鳴滝の了徳寺の大根炊きも同じルーツといえる。



徳山村のオベットウ箱

揖斐の「おとき」

岐阜別院の報恩講でいただいた甘い味噌汁とお菓子や果物なども盛りつけた「おとき」にはびっくり、生活圏はわずかしか

離れていないのに揖斐とは味も内容もかけ離れたものでした。

飛騨や郡上、白川のような山村、海津、羽島のような川の下流の平野、岐阜、大垣の都市の「おとき」はそれぞれの地域の食文化、宗教文化を映して興味深い。今回は揖斐の「おとき」を紹介する。揖斐では報恩講のほかお葬式でも「おとき」がだされ内容も作り方も江戸時代と殆ど変わっていないと思われる。材料は年行司（地区の当番）が寺へ集め報恩講の前日から当番のお取り持ちの奉仕で手分けして準備に掛かる。膳立て（膳組）は武家の正式の膳組みからきている黒漆塗りの四つ椀で、左手前の飯椀に白飯、右手前に汁椀で大根の千切り、豆腐、油揚げが実の赤味噌の味噌汁で刻みネギは入れない、右奥は壺椀でひじきの煮付け、左奥は平椀で丸揚げの煮付け、中央は陶器の手塩皿（おてしよ）に大根と人参

【特集】



のなますを盛り付け、たくあんは別皿に盛ってある。伝えられた味付けが守られており、マニユアルでなく人から人へ受け継がれ、どの寺にも生き字引のような人や采配を振る人がいる。寺によっては数百人分も要り、当日作っていられないので、なます、丸揚げ、ひじきは前日から作る。ご飯と味噌汁は暖かく他は冷たいということになる。お平の丸揚げは丸くて厚い油揚げで豆腐屋に注文して作ってもらうが、ひじきや人参が入ったひろうす（ひりょうす）ではな

い。昭和三十年ごろまで、お平は大根、さといも（じいも）の上に三角に切った油揚げをのせた。材料は持ち寄り集めた大根、さといもを使い油揚げだけ買った。経済的にも豊かになり、今では見栄えがする丸揚げが殆どである。味噌汁は甘くない。人を招待するとき食べ物を甘くするのは、砂糖が高い貴重品であった名残で、ハレのとき甘さを堪能すると、歓待とけちけちしない振る舞ったとみせたかったのであろう。

豆腐や油揚げなども高い食べ物で農家ではめったに口にできなかったたので「おとき」の豆腐入りの味噌汁はその頃の人々にとっては贅沢で飛びつきりおいしい食べ物であった。



お平の油揚げの門徒さんのお取り越し（報恩講）の食膳も同じで近所や親戚を

呼んで振る舞ったもので、お寺ではお取り越しの季節は重箱に詰めてもらった、いも、大根、油揚げが毎日の食膳に添えられた。お取り越しには赤柄の親いもを賽の目に切って、小豆と煮込んだ塩味の「いとこに」が添えられ美味であった。これも復活したい味である。

「おとき」は地域の食文化であるが、同じ揖斐郡でも山村では先に挙げた徳山のように食器のお椀や皿と共にご飯も持って行き味噌汁だけお寺で作って食べるところもあり、食べる時も朝のお勤めが終わった十時ごろ食べたりしている。煮付けなどを持ち寄り、残りや味噌汁も家に持ち帰るところもある。

究極のグルメ、究極の健康長寿食

「おとき」を食べてみるとわかるが、食べものが満ち溢れ、世界中の食べ物が食べられる飽食

の時代でもこの素朴な「おとき」は実においしい。煮込んだ豆腐の味噌汁だけでご飯はなん杯もたべられ、味の染み込んだなますは寒い時期なのにこれまた旨い。何百年と受け継がれたこの味が遣伝子に刷り込まれおいしいと感じる味覚になっているのである。受け継がれた味付けと料理方法、材料の新鮮さ、畑の肉と言われる大豆蛋白の豆腐、それに油が加わった丸揚げ、油揚げ、ひじきは海藻でミネラル十分、赤味噌は大豆の発酵食品、野菜は繊維の多い大根、カロチン豊富な黄緑野菜の代表の人蔘に酢が加えられたなます、ビタミンCを壊すような調理をしない。これはもう健康食、長寿食そのもので究極のグルメである。



昔人間にはチヨット 気になること

本膳の膳組は中央に手塩皿と
呼ぶ塗りでなく陶器の小皿が使
われ「おとき」ではこの皿にな
ますが盛られるが、近頃、飯碗
の蓋で代用しているのを見かけ
る。「おとき」を食べ終わるとお
椀にお茶を入れ椀の内側を洗い
器を返すのがマナーであるが、
洗ったお茶を飲むのが汚いと思
われるのか近頃は湯のみ茶碗を
出されるときがある。この作法
は本膳の作法で禅宗の食事やお
茶事の懐石でも正式な作法とさ
れている。ご飯のお代りをする
とき一口残すのも懐石の作法か
らきている。

「おとき」で活性化を

新しい事を次々やってみたく
れども、新しいことへの不確か
さより、先人の知恵と経験が集
められた確かなものと人々が気

付はじめたのか、最近の村おこ
し、町おこし、地域の活性化は
殆ど古いもの―祭りの復活、古
い町並の保存や回復、伝統芸能
の掘り起こしなど、古いこと、
伝統の見直しをしている。

報恩講の「おとき」をいただ
くことは待ちどおしい楽しみだ
った。おいしかった。と懐かし
む人々が多いのは、日常の食事
が貧しかったことだけの理由で
はなく、集まって食べる楽しさ、
凜と締まった黒塗りのお椀の膳
組、お給仕をしてもらう晴れが
ましさ、よそ行きを着てでかけ
る浮き浮きした緊張、普段とは
違うハレの日の子供の頃の思い
出も加えられた古き良きものへ
の思いである。報恩講と共に

「おとき」は誇るべき伝統である。
手間を省いておときをやめるの
ではなく逆に、使われずにしま
いこまれている会席膳や足付き
の膳を使い大切なお講の食膳と
して整え直し、あらたまった雰



囲気を醸し出して提供するには
お寺は相応しい場所であろう。
本山の「おとき」のように、袷で
給仕でもすればタイムスリップ
で話題を呼ぶ。古くて新しい本
物の伝統食、グルメ、健康食、
長寿食のキャッチフレーズで
「おとき」を蘇らせたらどうであ
ろうか。

揖斐では殆どの寺に「おとき」
を作る場所、いただく部屋があ

り、門徒さんの持ち寄りと奉仕
の仕組みが生きております。伝
統の「おとき」を召しあがりに
揖斐へどうぞ。



西光寺のおとき風景

皆様の地域の「報恩講」
「おとき」の情報、お便りを
お寄せください。

（文）片桐 勝信
（写真撮影）早野 久義

岐厚組の

基幹運動

岐厚組の基幹運動は、目標「御同朋の社会をめざして」、スローガン「へでできることから始めよう」、へともに聞こう、ともに手をつなごう、ともに生きよう」のもと十一の教化団体がそれぞれにテーマを決め、活発に活動しています。とくに、仏教婦人会や若婦人会の長良川病院の奉仕活動（毎月一回お寺毎に十人程度）や老人ホーム訪問も定着して参りました。

また、組連続研修会も今期は六十名の参加で、門徒の皆様への問いを大切に、講義を聞き、話し合いの場を持っています。また、お念仏をうけついでいてくれる若い人達をどうしたらお寺に集まってもらえるかも大きな課題であります。その一つとして若坊守さんたちによって、まず私達からと、小さな子

供たちをつれて、「解説礼拝聖典に学ぶ」をテーマとして声明練習、仏事作法などの研修がなごやかにもたれています。各お寺の若い人の友垣の輪の中心となつてもらえることを願っています。

寺族青年会では、「多くのいのちに目を向けよう」のテーマのもと、毎月第一・第三火曜日の午後七時三十分から、寺族青年・門徒さんたちと一緒に手話研修会が持たれています。この会は岐厚組だけに留まらず、各組の方々にも参加して頂いて、いろいろの場で、多くの人達とご縁が広がるようにと願っています。

三つめ、仏教音楽研究会（シャーラ）で讃仏歌を歌う会があります。若い人達にみ教えを解りやすくつたえていく手段として讃仏歌をうたっています。お年寄りから若い人まで、身体も心も大変健康的になれます。毎

月第三月曜日の午前十時より始まります。全教区のみなさん、ご希望の方々集まってください。

岐厚組々長 浅野教泉



仏教音楽研究会（シャーラ）

お念仏の伝統

飛驒における浄土真宗の弘通には、二つの流れが一般的に知られている。

一つは、合掌造りで知られている現在の犬野郡白川村に、鎌倉初期宝治年間（一二四七～四九）この地に足を踏み入れた嘉念坊善俊に依って浄土真宗の教えが伝えられ、弘安五年（一二八二）善俊終焉の地、白川郷鳩ヶ谷が飛驒真宗発祥の地とされている。

また大野郡阿多野郷にはじめて真宗が伝えられたのは文永年間（一二六四～七五）、越後高田浄興寺の善念坊が叔父嘉念坊を尋ね旅に出て、この地に浄土真宗の教えを伝えた。この両者は一族らしく同一系統と考えられる。

もう一つの流れは、美濃国各務郡平嶋大御所の天台宗普問堂に住していた願智坊永承（覚淳）

【組あれこれ】

が、本願寺第三世覚如宗主の教化によって門弟となり、正和三年（一三二四）の春に飛驒国益田郡小坂郷落合村に来て教化を始め、約十年この地に逗留した後、北に教化の道を進め、元亨三年（一三二三）の秋、荒城郡高原吉田村に移った。嘉暦元年（一二三二）九月五日「執持鈔」

が願智坊に授与されている。飛驒聞名寺の創建がこの頃であったと考えられる。その後、聞名寺は越中八尾へと進出した。現在の常蓮寺は願智坊の遺跡である。二、三の例外はあるがこの二つの流れが主体となつて、飛驒真宗の約七百五十年の歴史が刻まれてきたのである。

この長い飛驒の真宗の伝統の中で今も続けられている行事を二、三紹介する。まず、夏の行事には百年以上も前から続けられている、かつて教令講と言つた「仏教講習会」がある。この行事は、組内の法中が黄袈裟を

着け、講師に和上様の出講を願ひ、教学の研鑽を目指し、門徒・僧侶ともに布教を聴聞する。その後には法要と仏教婦人大会を行うのである。今年は九月九日から十三日まで、会所は古川町円光寺、西光寺。講師は山田行雄勸学。飛驒組物故門徒追悼法要などを実施した。

組の行事ではないが、先述した願智坊ゆかりの寺である神岡町吉田の常蓮寺では、「太子講」が毎年七月二十四日実施される。連夜、初夜法要後に太子踊りが午後八時より始まり、遠近各地より人々が集い、境内を埋める大盛況となる。

この太子踊りは寛永年間に、越中八尾より太子様の木像が古里の常蓮寺にお帰りになったことを喜んで踊つたのが始まりと言われる。今年発足した飛驒組の総代会理事会を神岡町吉田で開き、初夜法要に全員お参りをし法物を拝観した後、太子踊り

を見物した。同じ飛驒組の中でも初めて見る方が多く心に残つたとの感想が多かつた。



太子踊り

つぎに、古川町で恒例となつ

ている「三寺参り」がある。円光寺、本光寺、真宗寺の各寺が、親鸞聖人の御正忌報恩講法要を勤める一月十五日の初夜法要に次々にお参りしたのが始まりとなり、今では古川町の年中行事の一つとなっている。お寺の大きな蠟燭と、町の各所に雪

で造られた蠟燭の灯火は、凍てつく寒さのなか、阿弥陀さまの温もりを感じさせる。この「三寺参り」も特色ある長い伝統を持つ行事である。

他にも長い歴史を持つ行事が飛驒の寺院には多くのこつている。この稿が出るころは、寺やご門徒さんの報恩講で念仏の声がかかる喜びの季節となっている事でありましょう。

飛驒組々長 大江 命

組

浄土真宗本願寺派では全国を三十一の教区に分け、岐阜教区は一県で一教区となつています。岐阜教区はさらに十四に分けられ、それを「組（そ）」と呼んでいます。今回は岐阜市中央部の「岐厚組」と、「飛驒組」のたよりを載せました。

釈尊誕生の地ルンビニを訪ねて

さとりをひらかれた成道の地
—ブツダガヤ、五人の弟子に初
めて教えを説かれた初転法輪の
地—サルナート、入滅の地—ク
シナガラとともに四大仏蹟に数
えられてきた釈尊誕生の地—ル
ンビニを紹介いたします。

釈尊の聖蹟といいますが、先
ずはインドにある、と連想され
る方が多いかと思いますが、こ
ルンビニだけはインドではな
く、ネパールに位置しています。
とは言いまして、インドとの
国境付近で、ここを訪れるほと
んどの人は、バスなどに乗って
インドより陸路ネパールへ入り
ます。

【心の旅】

さて、皆様よくご存知の釈尊
生誕の時を振り返ってみましょ
う。釈尊の父はシャカ族の王ス
ットーダナ、母はマーヤ。マー
ヤ夫人が懐妊し月満ちて出産の
ため故郷へ向かう途中、見渡す

限り満開の花にいろどられたル
ンビニで休憩中、夫人の右脇か
ら釈尊が誕生しました。皆が祝
福し空からは甘露の雨がふるな
か釈尊は七歩あゆみ「天上天下
唯我独尊」と唱えたという生誕



釈迦誕生のレリーフ

ルンビニ遺跡中心部



アショカ王柱

の地がルンビニです。今からお
よそ二千六百年前のことです。

現在のルンビニは、広い土地
にアショカ王柱（ここに刻まれ
た詔勅文によってこの地が釈尊



菩提樹と浴池

生誕の地と証明された) マーヤ
堂の中には釈尊誕生の浮彫があ
るが現在は公園化整備のため仮
設のマーヤ堂が建てられている。



ルンビニの子ども

菩提樹と浴池（マーヤ夫人が釈
尊誕生の際沐浴したとも釈尊が
産湯につかったともいわれる）、
それに、寺院やゲストハウス・
土産物屋・数珠売り……。どこ
の聖地も観光化・俗化して喧噪
の中になりましたが、ここルン
ビニは荒涼たる風景でかえって
落ち着きを失うほどです。つい
に釈尊誕生の地に立つてみると、
ここは、誰が何を言い、何を思
おうが、インド・中国と伝えら
れてきた仏教の起点なのです。
私たち仏教徒の出発点ルンビニ
を是非とも訪れてみて下さい。
「ナマステ」と人々の合掌が温か
く迎えてくれることでしょう。
ルンビニはユネスコの世界遺
産にも登録され、現在は国連開
発本部に設けられたルンビニ開
発委員会による聖地公園化の整
備途中で、遺産の保存や周辺地
域の開発の動向が注目されると
ころです。

(文・写真 野村法宏)

| | | | |
|---|---|---|------|
| 一 | 〇 | 〇 | 周年記念 |
| 参 | 拝 | の | 記 |
| | | | 周年記念 |
| | | | 慶讃法要 |

八月二十六日午後、別院で結団式をすませ空港に向かいました。三時間近く遅れて出発しましたが、予定通りサンフランシスコに到着することができました。

二十八日、マリOTTホテルを会場に、世界浄土真宗大会がご門主、新門さま、お裏方ご臨席のもとに開催されました。開会式の三奉請の散華のため、全米の日曜学校の生徒がつくった華葩三枚が各自の名札の中に入れてあり、「散華楽」と唱えながら参加者全員による散華が行われました。子供達もともにこの百周年の行事にかかわっていることと素晴らしさを感じました。

基調法話で勸学の梯實圓師は「現代社会における念仏」と題し、人生は念仏の道場であり、永遠のいのちをひらくお念仏に育てられていると話されました。ス

ミス大名誉教授の海野大徹師は、「百周年の意義」と題し、念仏の種を運んできた船と開教使の努力により人々の暮らしの中に念仏が生きつづけて来たと話され、カールトン大助教授の海野マク師は、「アメリカでの真宗―二十一世紀に向けて」と題し、これは皆で考えるテーマであるとして百年後、肉体はなくなってもいのちは続いて行くこと、米国仏教団の今後について話されました。

昼食後、日本語会場では「現代社会における浄土真宗」をテーマにパネルディスカッションが行われ、梯實師と海野大徹師の対談がありました。

午後七時から百周年記念祝賀晩餐会が盛大に開かれ、初代開教使の孫にあたる和歌山教区の蘭田香融師の祝辞に続いて、新門さま、ご門主が日本語と英語



マリOTTホテルでの法要

で祝辞を述べられました。特にご門主が七十五周年大会に新門として参加されたこと、このたび新門さまと百周年にこられたことをよろこばれてお話しになり、二十五年の時の流れを感じました。南米ブラジルの方と同席しいろいろお話しがはずみ、お土産にコーヒーまでいただきました。

二十九日、北米開教百周年記念慶讃法要、蓮如上人五百回遠忌法要が、ご門主親修により行われました。法要の前に米国仏教団聖歌隊による、「ほほえみと共に、ナモアマミダブツ」のコーラスがあり、北米開教の歩みが朗読されました。移住された仏教青年の御本山への手紙が基で百年前に二人の開教使が海を渡って以来、数々のご苦勞を乗り越えてお念仏のともしびを弘められて今日に至ったことを感動とともに聞き入りました。行事の鐘のあと縁儀に始まり、厳粛に

【北米開教100周年記念】



米国仏教団聖歌隊



日曜学校の子らの手描の華葩

大会終了後、サンフランシスコ仏教団の佐々木千洋師のお寺に寄せていただき、ここでは世襲ではなく転勤、定年制であること、毎日曜午前は英語、午後は日本語でお勤めされること等を聞きました。坂の多いこの街は古い建物も多く落ち着いた感じをうけました。にぎやかな町並のフィッシャーマンズワーフ、霧のゴールデンゲートブリッジ、ヨセミテ国立公園の雄大な自然など、ちよっぴりアメリカものぞいて来ました。

法要が進められました。前日は後の席でテレビ画面を見ていましたが、二日目は中央の前の席で間近にご法要の雰囲気を感じることができました。新門さまの緋色の色衣が印象に残っています。文化や言葉の違いを超えて三千人のお正信傷が会場に響き、このご勝縁に会わせていただいたよろこびに胸一杯になりました。

華葩

【けは】法要で花びらをまいて仏さまにささげる儀式（散華）に使う紙の花びら。



アメリカの僧侶の方々



ヨセミテ国立公園にて

（本派仏婦総連盟副会長
岐阜教区仏婦連盟委員長

大野百合子）

基幹運動計画

一、理念

私たちの現状と課題

浄土真宗の宗祖親鸞聖人は、いのちのあるすべてのものが、本願を信じ念仏を申さば仏になるという、力強いみ教えを示してくださいました。私たちがこの教えに生きるとき、利己的な考え方で自他の命を計るのではなく、損得・利害を超えて、お互いのいのちのかがやきを見つめ直す生活が開かれます。これこそ御同朋の社会をめざす営みです。

現在の社会をかえりみると、近代文明の発展は、私たち人間に多くの利益をもたらしてきました。しかし、一方では、自己中心的な考え方が強まり、人類によってひきおこされた環境問題、民族間の対立、様々な差別など、いのちの大切さを見失うような問題があとを絶ちません。

このような社会のなかで、私たちの教団は同朋教団という旗をかかげながらも、部落差別をはじめとする社会の差別構造を教団自身に反映して、自らのもつ差別性をいまだに克服して得ず、また、戦争・ヤスクニ・人権・環境などの平和や社会の問題にも消極的なあり方を示しています。

基幹運動とは

基幹運動（門信徒会運動・同朋運動）は、このような社会と教団のありかたに目をそむけることなく、教団の中のさまざまな活動を一つひとつ点検して、自らと教団の差別の現実を改め、積極的に社会の問題に取り組む、御同朋の社会の実現に努める運動です。そのためには、私たちの生死出づべき道を問い聞いていくことと、虚仮なる世間を糺していくことは無関係であるとしてきた誤った教学を、一人ひとりがいま一度見直して、現実

を直視できる信心の社会性を明らかにしていくなかなくてはなりません。

「教書」には「念仏は、私たちがともに人間の苦悩を担い、困難な時代の諸問題に立ち向かうとする時、いよいよその真実をあらわします」とあります。私たちの念仏者は、この精神を基調として、全員が聞法し全員が伝道して、信心の行者としての限りなき努力をいたさねばなりません。

きたる二〇一一（平成二十三）年には親鸞聖人七百五十回大遠忌を迎えるにあたり、二十一世紀に向けて、浄土真宗のみ教えが、今を生きる私たちの依りどころとなり、教団がその努めを果たすことに力を合わせましょう。

二、目標

御同朋の社会をめざして

三、スローガン

念仏の声を世界に子や孫に

四、重点項目

*ともに聞こう！ とともに手をつなごう！ とともに生きよう！

現実の問題をみ教えに学び信心の社会性を明らかにしよう

浄土真宗聖典による学びを

*人びとの悩みに応える活動を展開し、お寺を活性化しよう

門信徒と僧侶がともに歩む基幹運動態勢の充実を

*私と教団の差別の現実を改め、

真の同朋教団を確立しよう

寺院・組・教区における研修の徹底を

*戦争・ヤスクニの事実学び、平和を尊ぶ仏教の精神を身につけよう

研修を通じて私たちの課題をあきらかに

*人権・環境をはじめとする社会の問題に取り組む、いのちの尊厳をまもろう

生活の場を通じての学習と実践を

実践を

【基幹運動のページ】

仏事作法

仏事作法などというとき重々しくてなんだろうと思われるかも知れませんが、阿弥陀様に対しての私たちの接し方すべてと考えていただければ良いでしょう。真宗門徒の家にはたいていお仏

壇を中心とした信仰生活が営まれています。そのお仏壇のお給仕、例えばお道具の正面・正しい位置・お荘厳の仕方、お参りする時の焼香・合掌・勤行の仕方など日常のことから、仏前結婚式や初参式、ご葬儀やご法事、その他寺院行事に参拝したりお迎え

するなどといった仏事全般にたいする作法、心構えをいいます。それぞれの形式は心の表れであり、教義と信仰、さらに文化の具象と言えます。なんとなくお荘厳したり、写真や位牌に手を合わせお水を供えたり、迷信ことに振り回されないよう、真宗の正

しい考え方に沿った作法を身につけていただきたいと思います。お仏壇のお荘厳
お仏壇により多少の違いはありますが、写真はお荘厳の一例です。
お道具も正面(私たちから見ても)揃え、足が奇数であれば一つの足が正面、偶数であれば正面には角はきません。耳つきのものであれば耳が横にまっすぐ並びます。お仏壇には、お水や写真・他宗のお札など余計なものは飾らずスッキリとした形で阿弥陀様を安置させていただきたいものです。

五具足でお飾りしたお仏壇の例



お荘厳

【しよごん】仏具、お華、お供え、打敷などをととのえ、おかざりすること。

文 稲川 善照
基幹運動推進委員会
常任委員
勤式練習会 副理事長

この号の ことば

如燈風中

表紙コラムの「如燈風中」という言葉は、お寺の報恩講でよくおつとめされる「往生礼讃」の『日没礼讃偈』というお経の中にあります。このお経の後半にお導師が独りで少し音程を変えて読まれる「無常偈」に出てきますので『日没礼讃』のおつとめの時には注意して聞いて下さい。

「人間 息患 営衆 務 不覚 年命 日夜 去 如燈 風 中 滅 難 期 忙 忙 六道 無 定 趣 未 得 解 脱 出 苦 海 云 何 安 然 不 驚 懼 各 聞 強 健 有 力 時 自 策 自 勵 求 常 往」

「人間はいそがしく日常生活のつとめにかかわって、いのちが日夜に去ることを知らぬ、あたかも風の中の燈がいつ消えるとも期しがたいようである。いそがしく六道をへめぐってさだまれるところがない。いまだに解

脱して苦海をでることができない。どうして安閑としていて驚かずにおられようか、おのおの聞かれよ健康で元気なときに、自らつとめ、はげんでさとりを求めよ。【意識】(文 杉山雲来)

お知らせ

教区・別院の行事予定

『第九回部落解放講座』

期日 ①十一月十日(水)

②十一月二十四日(水)

時間 ①②とも午後六時半より

会場 岐阜県勤労福祉センター

岐阜市鶴田町三丁目七一

十一

『門徒総代会 理事研修会』

期日 十一月二十五日(木)

会場 岐阜別院

『岐阜別院報恩講法要』

日時 十二月四日(土)～六日(月)

四日 日中法要 午前十時

逮夜法要 午後一時

引続き御伝鈔拝読

五日 日中法要 午前十時

逮夜法要 午後一時

引続き御伝鈔拝読

初夜法要 午後七時

六日 日中法要 午前十時

引続き御俗姓拝読

講師 大江智朗布教使

(北豊教区 金剛寺)

お斎 十二月四日と五日

(香光殿にて)

また、岐阜別院報恩講御満座(六日)にあわせて、岐阜教区布教団主催の、「開法の集い」も開催されます。

『門信徒の集い』

日時 三月五日(日) 午後一時

会場 岐阜別院 本堂

広報部

部長 杉山雲来 中川北組 正尊寺

名和幸夫 丸一組 浄明寺

日野安晃 東陽組 光圓寺

梁瀬秀臣 黒野組 明善寺

横山秀樹 黒野組 香教寺

片桐勝信 撰斐組 陽勝寺

野村了嗣 撰斐組 西光寺

野村法宏 西濃北組 浄妙寺

教務所 箕浦良信・辻 信昭

平成十一年度より、岐阜教区の基幹運動推進委員会の任期満了にともない、新しい広報部によって編集し年二回発行する事にしました。

*
より幅広い世代の皆さま読んでいただきたいという願いをこめて紙面内容をリニューアルしました。

*
いかがでしょうか。

*
感想ご意見をお待ちしております。

